

痛くないなら“がん”はだいじょうぶ？

消化器の“がん”の症状についてお話します。現在“がん(悪性新生物)”が日本人の死因第一位となり、統計上では日本人二人に一人が“がん”にかかり、三人に一人が“がん”で死ぬ時代です。“がん”になる事は怖いことであり、ふだんの皆さんの会話の中で「最近、胃が痛いので“がん”が心配！」とか「痛くないから“がん”は心配ない」等と話したりしていませんか？

“がん”とは死にいたる悪性疾患の一般的総称で、血液のがんである白血病などを含みますが、“癌”は胃、大腸、肝臓などの上皮由来の細胞から発生した悪性腫瘍を示します。胃粘膜などの上皮細胞が突然“奇形化”し、異常な分裂増殖を繰り返すことで小さな“コブ”から次第に大きな塊となっていく、実は自分の体の一部なのです。そのため発生からある程度進展するまでは何の症状も見られないのが普通なのです。

癌は痛みを伴い、モルヒネなど麻薬を使いながら苦しむイメージをお持ちの方もおられるでしょうが、これは大きくなった(進行)癌が周辺の神経や臓器を蝕むようになった時などに見られるものであり、まだ腫瘍として小さい段階である早期癌の状態では、まず症状は見られません。悲しいことに周辺に浸潤し症状を伴うようになった高度進行癌では医学の進歩した現代でも根治は困難ですが、早期癌で発見できれば殆どと言って良いほど根治が期待できるようになってきています。「早期癌は治る！」のです。

そこでいかに早期の段階で癌を発見できるかが生死を別けることに繋がり、その為には症状の有無に関係無く定期的な検診を受けることが大事である事をご理解頂きたいと思います。多くの癌検診は年に一度受けることが勧められています。検診に関してはお近くの医療機関でご相談ください。